

虐待から子どもの命を救う

教育委員 橋本 和明

子ども虐待のニュースは毎日のように流れます。そして、毎年虐待によっておおよそ70人前後（心中も含め）の子どもの命が奪われているのも実情です。去年は東京都目黒区で、今年になってからは千葉県野田市で尊い命を奪われました。なんとも痛ましい限りの事案であり、社会の注目を引きました。私は厚生労働省の児童虐待死亡事例の検証委員を務めているので、そのような事案の関係者からのヒアリングを行ったりしています。そして、そこからわかったことを地方自治体や国に対して提言という形で訴えているのです。

そして、豊中市では教育委員をさせてもらっているのですが、その立場からも合わせて発言させていただけるのであれば、子ども虐待を防止するには地域や学校の役割はとても大きな役割があると感じています。近所の人には子どものちょっとしたサインを見逃さない、地域に住む人たちは互いに相手を尊重しながらも気遣いや関心を忘れない、そんな安心安全が保障された社会になるようにしていかなければなりません。また、保育所、幼稚園、小中学校、高校といった機関は、子どもとのかかわりも多いので、子ども虐待を発見しやすいところでもあります。虐待の疑いがあればすぐに虐待通告をし、さまざまな機関と連携しながら早期の介入や予防に努めてもらいたいと願っています。

これはあくまでも私のことで恐縮なのですが、悲惨な虐待の事案を見聞きすると、いつも『シャボン玉』の歌が脳裏によぎってしまいます。この歌をご存じでしょうか？

「シャボン玉飛んだ。屋根まで飛んだ。屋根まで飛んで、こわれて消えた。風 風 吹くな。シャボン玉飛ばそ。」

なんと楽しそうな光景が浮かんできます。でも、二番目の歌詞はこうです。

「シャボン玉消えた。飛ばずに消えた。生まれてすぐに、こわれて消えた。風 風 吹くな。シャボン玉飛ばそ。」

一説には、これを作詞した野口雨情ははかなく散った自分の娘への切ない想いを込めてこれを作ったとも言われています。そう考えると、この歌は幼くして命を亡くした子どもへの鎮魂歌であるかもしれません

私は虐待で命を亡くした子どもと、「生まれてすぐに、こわれて消えた」シャボン玉がどうも重なってしまうのです。もし生まれたその時に風が吹いておらず、環境が整っておれば、もっともっとシャボン玉は高くまで飛んでいったらうに、と考えたりします。

児童相談所での虐待相談件数は年々増え続けています。どこかでそれにストップをかけ、子どもの命を救う責任がわれわれ大人にあることをもう一度自覚したいと思います。